

『そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。』

(使徒言行録 20 章 32－35 節)

今日は、花の日・こどもの日の礼拝です。こどもと大人がいっしょになって、神さまにお祈りをいたします。たくさんのお花が集まっていますね。このお花をきれいだなと思う気持ちは、子どもも大人も同じだと思います。お花を見て、「きれいだな」と思える心というのは、実はとても貴重なことなのだと思います。いつも忙しかったり、大変な心の重荷を抱えていたりすると、せつかくのきれいなお花でもきれいだと思える心のゆとりがなくなってくることもあります。ですのでお花を見て、もしすてきだなと思えるとしたら、そういった状況が与えられていることを神さまに感謝したいと思います。

今日の聖書の言葉には、「受けるよりは、与える方が幸いである。」(35 節)という言葉があります。色々人からもらうよりも、人にあげる方が実は幸せなんですよというイエスさまの言葉です。どうでしょうか、皆さん、そう思いますか？正直に言うならば、人にあげて無くなってしまふより、もらう方がずっと良いと思ってしまふかも知れません。これも先ほどのお花の時と同じで、もし受けるよりも、与えることの方が幸せだと思えるとしたら、それはとても良い心の状態にあると言えると思います。毎日の生活が厳しくて、心のゆとりが持てないような状況では、とても人に与える余裕はないですね。何とか自分の身を守るために、必死に物や何かを人から奪い取るようにしてまでも、身の回りに集めることになってしまうと思います。

そんな中で、与えることがとても上手な人というのがいます。それは誰かと言いますと、小さいこどもたちです。小さい子たちは、とても気前よく人に何でもあげてしまいますね。「ハイ、どうぞ」と言って、何でも執着しないで自分から手放すことができます。どうしてそんなことができるのでしょうか。それは、人にあげて無くなってしまっても、またもらえると安心しているからです。どんどん惜しみなく与えるのは、その子たちに惜しみなく与えてくれる家族などの大人たちがいるからです。自分の食べることは後にして、まず子どもたちを十分食べさせようとしてくれた大人たちの存在がそこにはあったはずですよ。お母さんやお父さんの服はずっと何年も同じでも、こどもに新しい洋服を買ってあげて喜んでくれる後ろ姿が、そこにはきっとあったのでしょう。そのようにして、受けるよりも与えることに喜びを見いだした大人たちの存在が、こどもたちにその幸せを引き継がせているのですね。

こうして人間の命というものは、次の世代の人々に引き継がれて行くのですが、しかし不幸にして、小さいこどもの頃にそのような安心して大人たちに信頼することができないかったこどもたちもいます。ぎりぎりの生活をする中で手一杯になってしまい、とてもこどもたちに気持ちを向けることの出来ない大人の人たちがいます。初めは何を置いてもこどもの命を守ろうと考えていても、途中でど

うしたらよいのかわからなくなってしまう、子どもを犠牲にしてしまうことだってあります。テレビのニュースで、小さい子どもが厳しい生活の犠牲になって命を落とすという事件のことが、報道されています。ただ、そうなってしまったらもうおしまいだということではありません。私たち人間は、大きな失敗もしてしまいますが、しかしまたやり直すことも出来るのですね。神さまは、そのようなどうして良いのかわからなくなった人たちほど、ご自分の所に、教会に招いて下さいます。子どもの頃に十分に大人たちに大切にされなかった人ほど、実は神さまの家族になるのに最も近いところにいるのです。

今日の聖書の言葉の中で、「**神とその恵みの言葉とに、あなた方を委ねます**」(32 節)というところがありました。これはパウロという教会の年長者が、次の世代の人たちを神さまにお委ねするという場面です。その時パウロは、同時に**神の恵みの言葉**に、次の世代の人々をお委ねしたのです(神と恵みの言葉は同格)。イエスさまの教会では、このようにして代々次の世代に引き継ぐとき、この神さまの恵みの言葉よって引き継がれて来ました。この恵みの言葉は、人にはとても出来ないことを、出来るようにしてしまう力があります。「死者に命を与え、存在していないものを存在させるのが、我々が信じている神なのです」(ローマ 4 章 17 節)という恵みの言葉があります。そのような全く何もないところから、命を創り出してしまう神さまです。ですので、たとえ私たちの人生が死んでしまったようになったとしても、もう一度造り替えてくださり再び建て直して下さることが出来るのです。受けること、もらうことばかりに心が向かっていた人たちを、神さまの恵みの言葉は変えてくださいます。他人の金銀や衣服を貪っていた人たちを、自らの手で働くものに変えてくれるのです。そしてそれどころか、他の人たちのために働いて弱い人たちを助けることに、喜びを見いだす人へと造り替えてくれるのです。

以前は、惜しみなく人に与えて、なんでも進んで人が喜んでくれることをしていたとしても、段々元気が無くなってしまふこともあると思います。そういう時は、心の中に力、エネルギーが枯れてしまっているのですね。そうなったらいくら頑張ろうとしても体は思うように動かずに、返ってダメな人間なんだと自分を責めてしまうことにもなりかねません。そういう時はゆっくり休むことが大切です。教会の毎週の礼拝は、別の言い方をしますと「**安息日**」と言います。神さまが1週間の内の 1 日を、仕事や勉強を休んでゆっくり体や心を休息出来るようにもうけて下さった特別な時です。この休息することは、自分ばかりのためではありません。自分が休んで心にまた一杯力をためることで、回りのお友達や家族の人たちにとっても、とても良いことです。特に周りの人たちが弱っていたり、問題を抱えているときに、元気でいることでその人たちを支えて励ますことができます。自分も弱ったままで心が枯れていたら、手をさしのべたりその横に寄り添うことだって出来ません。周りの人たちや家族の代表として、神さまの恵みの言葉から力を補充するために、自分が選ばれているのだと考えることも大切だと思います。この世界に満ちている力、エネルギーの源は、すべて神さまから出ています。ですので、安息日にその一番大元に近づくことは、もっとも効率よく私たちのいのちをよみがえらせることが出来るのですね。

この後、お花を届けに行きます。その訪ねるみなさんは、この萩の地で神さまのいのちをよみがえらせる力の源として、働いてきて下さった方たちです。今は、自分から教会に行くことが難しくなっています。ですから、私たちの方からお花を届けに行くことで、神さまの恵みの力を手渡しに行きたいと思えます。「受けるよりも、与えることが出来ることは幸せなのだ」というこの恵みの言葉を、心に入れてここから出て行きたいと願います。